

第 4 部

脳卒中患者動向調査票（退院時）

I. 回収状況

退院時調査票は合計で 1,483 件が回収された (表 1-1)。

表 1-1 退院時調査票回収状況

病院の所在圏域	回収数	
千葉	305	20.6%
東葛南部	407	27.4%
東葛北部	205	13.8%
印旛	131	8.8%
香取海匝	73	4.9%
山武長生夷隅	101	6.8%
安房	97	6.5%
君津	43	2.9%
市原	121	8.2%
合計	1,483	100.0%

II. 疾患

脳梗塞が 817 人 (55.1%)、脳出血は 271 人 (18.3%) であった (図 2-1)。

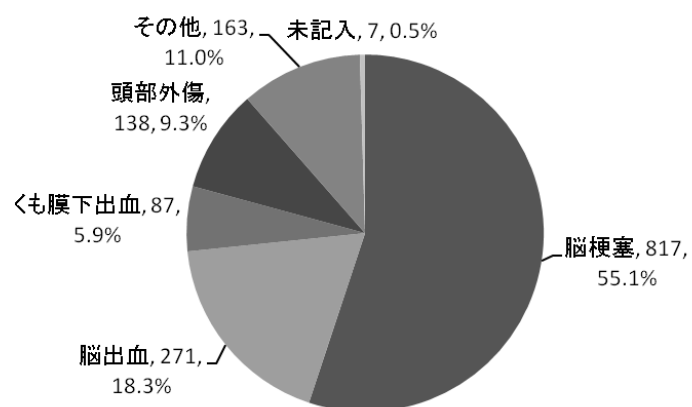


図 2-1 疾患 n=1,483 (単位: 人、%)

Ⅲ. 性別と年齢

性別は、男性 848 人 (57.2%)、女性 621 人 (41.9%) であり、年齢は 70 歳代が 400 人 (27.0%) と最も多く、次いで 60 歳代、80 歳代が多かった。

性別と年齢の関係では、男性は 70 歳代が 269 人 (31.7%) と最も多く、女性では 80 歳代が 199 人 (32.0%) と最も多かった (表 3-1)。

表3-1 性別と年齢 (単位:人、%)

年齢	男性		女性		未記入		合計	
10歳未満	5	0.6%	4	0.6%	0	0.0%	9	0.6%
10代	8	0.9%	5	0.8%	0	0.0%	13	0.9%
20代	9	1.1%	10	1.6%	0	0.0%	19	1.3%
30代	20	2.4%	17	2.7%	0	0.0%	37	2.5%
40代	40	4.7%	16	2.6%	1	7.1%	57	3.8%
50代	112	13.2%	51	8.2%	4	28.6%	167	11.3%
60代	228	26.9%	126	20.3%	3	21.4%	357	24.1%
70代	269	31.7%	127	20.5%	4	28.6%	400	27.0%
80代	134	15.8%	199	32.0%	2	14.3%	335	22.6%
90歳以上	21	2.5%	61	9.8%	0	0.0%	82	5.5%
未記入	2	0.2%	5	0.8%	0	0.0%	7	0.5%
合計	848	100.0%	621	100.0%	14	100.0%	1,483	100.0%

Ⅳ. 患者居住地

患者居住地では東葛南部圏域が 344 名 (23.2%) と最も多く、次いで千葉圏域の 231 名 (15.6%)、東葛北部圏域と山武長生夷隅圏域の 181 名 (12.2%) であった (表 4-1)。参考として平成 21 年 4 月 1 日現在の圏域別人口を示した (表 4-2)。

表4-1 患者居住圏域

	人数(人、%)	
千葉	231	15.6%
東葛南部	344	23.2%
東葛北部	181	12.2%
印旛	175	11.8%
香取海匝	57	3.8%
山武長生夷隅	181	12.2%
安房	70	4.7%
君津	54	3.6%
市原	77	5.2%
県外	102	6.9%
未記入	11	0.7%
合計	1,483	100.0%

表4-2 圏域別人口(H21.4.1)

	人口 (人、%)	
千葉	947,832	15.2%
東葛南部	1,591,875	25.5%
東葛北部	1,445,391	23.2%
印旛	715,530	11.5%
香取海匝	311,642	5.0%
山武長生夷隅	470,148	7.5%
安房	141,408	2.3%
君津	330,286	5.3%
市原	285,033	4.6%
合計	6,239,145	100.0%

V. 退院時病床

一般病床から退院した患者が最も多く 1,009 人 (68.0%) であった (図 5-1)。

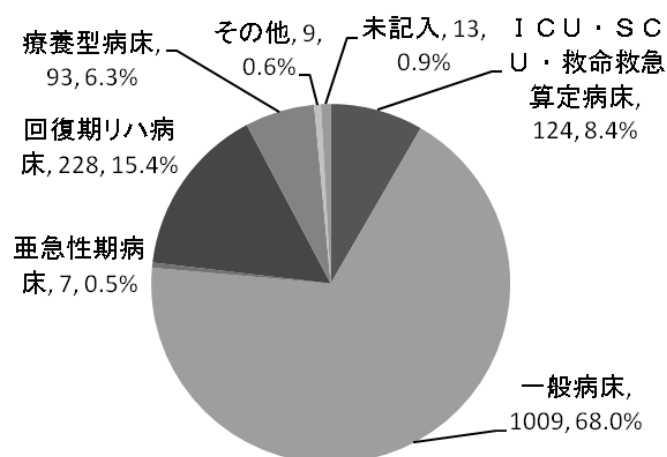


図 5-1 退院時病床 n=1,483 (単位:人、%)

VI. 転退院先種別

在宅への退院者が 744 人 (50.2%) と最も多く、次いで死亡が 172 人 (11.6%)、回復期リハビリテーション病棟 (病院) の 135 人 (9.1%) であった (図 6-1)。

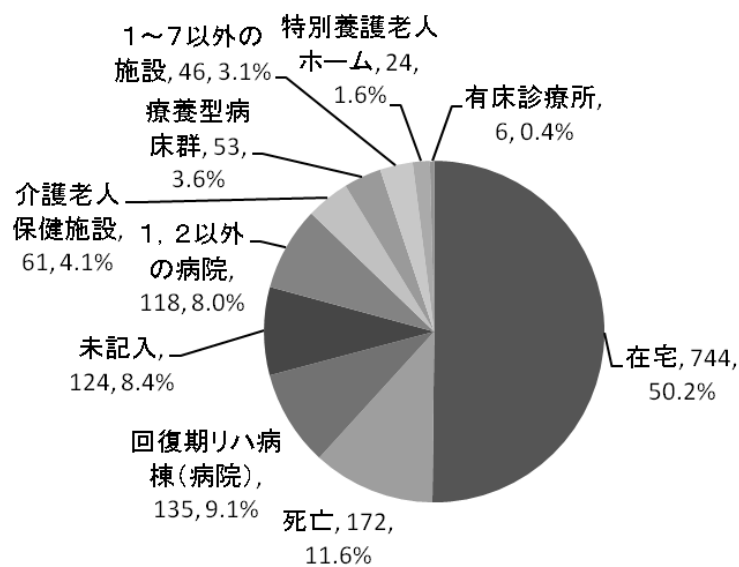


図 6-1 転退院先種別 n=1,483 (単位:人、%)

VII. modified Rankin Scale

退院時の modified Rankin Scale (以下、mRS) については「Grade 1」の 286 人 (19.3%) が最も多く、次いで「Grade 4」の 260 人 (17.5%) であった (図 7-1)。mRS については表 7 に示した。

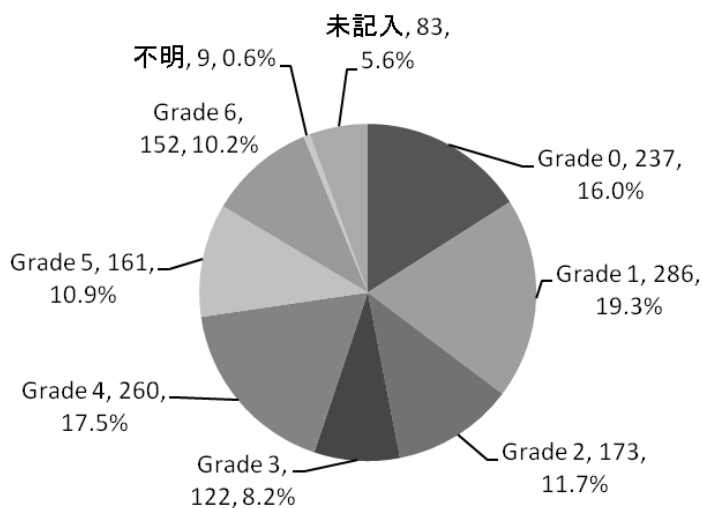


図 7-1 mRS n=1,483 (単位: 人、%)

表 7 modified Rankin Scale

Grade 0	全く症状なし
Grade 1	症状はあるが特に問題となる障害なし (通常の日常生活及び活動は可能)
Grade 2	軽度の障害 (以前の活動はできないが、介助なしに自分のことができる)
Grade 3	中等度の障害 (何らかの介助を必要とするが、介助なしに歩行可能)
Grade 4	比較的高度の障害 (介助なしに歩行や日常生活を行うことが困難)
Grade 5	高度の障害 (寝たきり、失禁、特に看護や注意が必要)
Grade 6	死亡

VIII. 退院時併存障害

特に退院時に併存障害が無い患者が最も多く、820人（55.3%）であった。

併存障害としては、認知症が166人（11.2%）、次いで意識障害が104人（7.0%）、危険行動を伴う高次脳機能障害が77人（5.2%）であった（図8-1）。このように併存障害の上位3位までは、認知・精神・意識面に関わる障害であった。

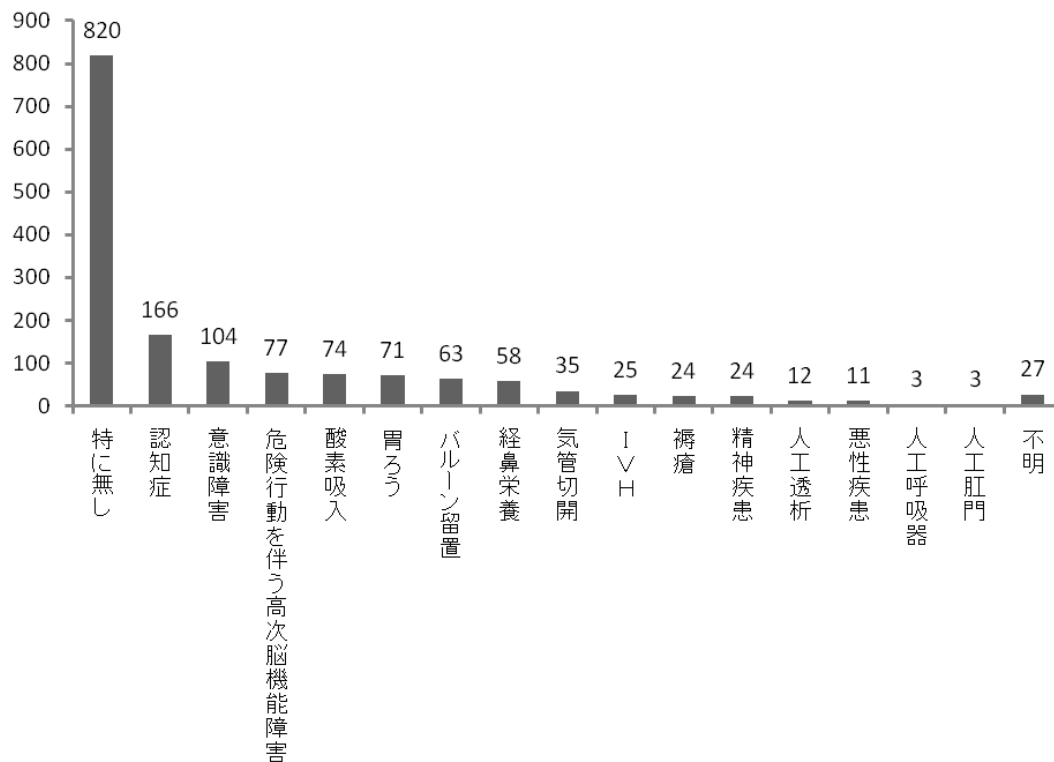


図8-1 退院時併存障害 n=1,483（単位：人）

IX. 患者居住地と退院医療機関所在地

どの圏域の居住者が、どこの医療圏域にある医療機関から退院したのかを表 9-1 に示した。

それぞれ患者の居住圏域の医療機関から退院している割合が高かったが、その割合には差があった。

居住圏域の病院から退院している割合が高かったのは、安房圏域の 70 人中 69 人 (98.6%)、千葉圏域の 231 人中 210 人 (90.9%) であった。

一方、患者の居住圏域と退院した医療機関の所在圏域との一致率が低いのは、山武長生夷隅圏域の 181 人中 82 人 (45.3%)、印旛圏域の 175 人中 92 人 (52.6%) であった。山武長生夷隅圏域では 181 人中 37 人 (20.4%) が市原圏域から、そして 26 人 (14.4%) が千葉圏域から退院していた。また、印旛圏域では 175 人中 38 人 (21.7%) が東葛南部圏域から、そして 24 人 (13.7%) が千葉圏域から退院していた。

医療機関の所在圏域から見ると、それぞれが 5 から 8 圏域の患者を退院させていた。

表9-1 患者居住地と退院した病院の所在地 (上段:人, 下段:%)

	医療機関所在地									
	千葉	東葛南部	東葛北部	印旛	香取海匠	山武長生夷隅	安房	君津	市原	合計
千葉 n=231	210	14		4		1		1	1	231
	90.9	6.1		1.7		0.4		0.4	0.4	100
東葛南部 n=344	22	302	7	5	5	1		2		344
	6.4	87.8	2.0	1.5	1.5	0.3		0.6		100
東葛北部 n=181	3	14	157	4	1		1		1	181
	1.7	7.7	86.7	2.2	0.6		0.6		0.6	100
印旛 n=175	24	38	5	92	7	9				175
	13.7	21.7	2.9	52.6	4.0	5.1				100
香取海匠 n=57		2	1	5	48	1				57
		3.5	1.8	8.8	84.2	1.8				100
山武長生夷隅 n=181	26	5		10	6	82	15		37	181
	14.4	2.8		5.5	3.3	45.3	8.3		20.4	100
安房 n=70							69	1		70
							98.6	1.4		100
君津 n=54	2	1					8	35	8	54
	3.7	1.9					14.8	64.8	14.8	100
市原 n=77	6					1	1	2	67	77
	7.8					1.3	1.3	2.6	87.0	100
県外 n=102	11	27	35	10	5	4	3	2	5	102
	10.8	26.5	34.3	9.8	4.9	3.9	2.9	2.0	4.9	100
未記入 n=11	1	4		1	1	2			2	11
	9.1	36.4		9.1	9.1	18.2			18.2	100
合計 n=1,483	305	407	205	131	73	101	97	43	121	1,483
	20.6	27.4	13.8	8.8	4.9	6.8	6.5	2.9	8.2	100

は5%以上の圏域を表す

X. 退院時病床と転退院先種別

退院時の病床別に、転退院先を表 10-1 に示した。なお 本調査では院内での転棟は把握できないため、例えば救急で受け入れた患者が、その病院内で回復期リハビリテーション病棟へ転棟した場合等は、ここでは含まれていない。

ICU 等から退院した 124 人については、自宅退院が 54 人 (43.5%) と最も多く、次いで死亡が 34 人 (27.4%)、回復期リハビリテーション病棟 (病院) へ転院した人は 10 人 (8.1%)、であった。

一般病床から退院した 1,009 人については、自宅退院が 505 人 (50.0%) と最も多く、次いで回復期リハビリテーション病棟 (病院) が 123 人 (12.2%) であった。

回復期リハビリテーション病床から退院した 228 人については、自宅退院が 156 人 (68.4%) であった。

また療養型病床から退院した 93 人のうち 54 人 (58.1%) が死亡退院であった。

表10-1 退院時病床と転退院先種別 (上段:人, 下段:%)

	転退院先種別										合計	
	回復期リハ 病棟(病院)	療養型病床 群	1, 2以外の 病院	在宅	有床診療所	介護老人保 健施設	特別養護老 人ホーム	1~7以外 の施設	死亡	未記入		
退 院 時 病 床	ICU・SCU・救命 救急算定病床 n=124	10 8.1	1 0.8	17 13.7	54 43.5				1 0.8	34 27.4	7 5.6	124 100
	一般病床 n=1,009	123 12.2	41 4.1	70 6.9	505 50.0	6 0.6	37 3.7	15 1.5	31 3.1	78 7.7	103 10.2	1,009 100
		亜急性期病床 n=7	1 14.3			4 57.1		2 28.6				
	回復期リハ病床 n=228	1 0.4	8 3.5	22 9.6	156 68.4		15 6.6	5 2.2	9 3.9	1 0.4	11 4.8	228 100
		療養型病床 n=93		3 3.2	9 9.7	14 15.1		6 6.5	3 3.2	4 4.3	54 58.1	
	その他 n=9					3 33.3		1 11.1		1 11.1	2 22.2	2 22.2
		未記入 n=13				8 61.5			1 7.7		3 23.1	1 7.7
	合計 n=1,483		135 9.1	53 3.6	118 8.0	744 50.2	6 0.4	61 4.1	24 1.6	46 3.1	172 11.6	124 8.4

XI. 回復期リハビリテーション病棟の所在地と退院患者居住地

回復期リハビリテーション病棟から退院した 228 人について、どの圏域の居住者が、どの圏域の回復期リハビリテーション病棟から退院したのかを表 11-1 に示した。

安房圏域の居住者は、全て居住圏域内の回復期リハビリテーション病棟から退院しており、東葛南部の居住者は 56 人中 55 人 (98.2%) が居住圏域の回復期リハビリテーション病棟から退院していた。また、千葉圏域、東葛南部圏域、東葛北部圏域、香取海匝圏域、市原圏域の居住者は、割合に差はあるものの居住圏域と他の 1 つの圏域の回復期リハビリテーション病棟から退院していた。

一方、印旛圏域と君津圏域の居住者は全て他圏域の回復期リハビリテーション病棟から退院していた。

また、山武長生夷隅圏域の居住者は、16 人中 5 人 (31.3%) ずつが千葉圏域と東葛南部圏域の回復期リハビリテーション病棟から退院しているほか、5 圏域に分散して入院していた状況が認められた。

表11-1 回復期リハビリテーション病床の所在地と退院患者居住地 (上段:人, 下段:%)

	病院所在地(圏域)										合計
	千葉	東葛南部	東葛北部	印旛	香取海匝	山武長生夷隅	安房	君津	市原		
千葉 n=31	18 58.1	13 41.9									31 100.0
東葛南部 n=56	1 1.8	55 98.2									56 100.0
東葛北部 n=33		4 12.1	29 87.9								33 100.0
印旛 n=37	3 8.1	30 81.1	1 2.7		2 5.4	1 2.7					37 100.0
香取海匝 n=10		2 20.0			8 80.0						10 100.0
山武長生夷隅 n=16	5 31.3	5 31.3			1 6.3	2 12.5	3 18.8				16 100.0
安房 n=11							11 100.0				11 100.0
君津 n=8	1 12.5	1 12.5					5 62.5		1 12.5		8 100.0
市原 n=6	3 50.0								3 50.0		6 100.0
県外 n=19	1 5.3	9 47.4	7 36.8		1 5.3				1 5.3		19 100.0
未記入 n=1						1 100.0					1 100.0
合計 n=228	32 14.0	119 52.2	37 16.2		12 5.3	4 1.8	19 8.3		5 2.2		228 100.0

は10%以上の圏域を示す

XII. 回復期リハビリテーション病棟へ転院した患者の mRS と退院時病床

回復期リハビリテーション病棟へ転院した 135 名を抽出し、退院時病床と mRS の関係を表 12-1 に示した。これについても、先述の通り院内転棟については反映されていない。

それぞれ、Grade 4 が最も多く、全体としては 135 人中 62 人 (45.9%) を占めていた。

一般病床から回復期リハビリテーション病棟へ転院している状態は Grade 1 から Grade 5 と幅広く、介助がなく歩行が可能なレベルである Grade 1 から Grade 3 までで 45 人 (36.6%) であった。

表12-1 回復期リハビリテーション病棟へ転院した患者のmRSと退院病床 (上段:人, 下段:%)

	mRS									
	Grade 0	Grade 1	Grade 2	Grade 3	Grade 4	Grade 5	Grade 6	不明	未記入	合計
退 院 時 病 床	ICU・SCU・救命 救急算定病床 n=10			2 20.0%	5 50.0%	3 30.0%				10 100.0%
	一般病床 n=123	3 2.4%	21 17.1%	21 17.1%	55 44.7%	16 13.0%		1 0.8%	6 4.9%	123 100.0%
	亜急性期病床 n=1				1 100.0%					1 100.0%
	回復期リハ病床 n=1				1 100.0%					1 100.0%
	合計 n=135		3 2.2%	21 15.6%	23 17.0%	62 45.9%	19 14.1%		1 0.7%	6 4.4%

はそれぞれ最多のGrade

表 12-2 modified Rankin Scale

Grade 0	全く症状なし
Grade 1	症状はあるが特に問題となる障害なし (通常の日常生活及び活動は可能)
Grade 2	軽度の障害 (以前の活動はできないが、介助なしに自分のことができる)
Grade 3	中等度の障害 (何らかの介助を必要とするが、介助なしに歩行可能)
Grade 4	比較的高度の障害 (介助なしに歩行や日常生活を行うことが困難)
Grade 5	高度の障害 (寝たきり、失禁、特に看護や注意が必要)
Grade 6	死亡

XIII. 在宅へ退院した患者の mRS と退院時病床

在宅へ退院した 744 名について、退院時病床と mRS の関係を表 13-1 に示した。

前節で述べた、回復期リハビリテーション病棟への転院群に比して、身体機能が良い Grade に偏位していることと多様性が認められた。

ICU 等では Grade 0 が 54 人中 31 人 (57.4%) と最も高い割合を占め、Grade 1 と合わせると 87% を占めていた。

一般病床では、Grade 1 が最も多く 505 人中 162 人 (32.1%)、次いで Grade 0 が 158 人 (31.3%) であり、両者で 63.4% であった。

回復期リハビリテーション病棟では、Grade 2 が 156 人中 53 人 (34.0%) と最も多く、次いで Grade 1 の 37 人 (23.7%) であった。前節で述べた回復期リハビリテーション病棟へ転院する身体状況よりも障害程度が軽い状態での自宅への退院が多い一方で、156 人中 32 人 (20.5%) が Grade 4,5 の状態で自宅へ退院していた。

表 13-1 在宅へ退院した患者の mRS と退院時病床 (上段: 人, 下段: %)

	mRS										
	Grade 0	Grade 1	Grade 2	Grade 3	Grade 4	Grade 5	Grade 6	不明	未記入	合計	
退 院 時 病 床	ICU・SCU・救命救急算定 病床 n=54	31	16	4	2	1					54
		57.4	29.6	7.4	3.7	1.9					100
	一般病床 n=505	158	162	75	35	35	15		1	24	505
		31.3	32.1	14.9	6.9	6.9	3.0		0.2	4.8	100
	亜急性期病床 n=4		1		2	1					4
			25.0		50.0	25.0					100
	回復期リハ病床 n=156	4	37	53	26	29	3			4	156
		2.6	23.7	34.0	16.7	18.6	1.9			2.6	100
	療養型病床 n=14	1	1	3	3	4	2				14
		7.1	7.1	21.4	21.4	28.6	14.3				100
	その他 n=3	1					2				3
		33.3					66.7				100
	未記入 n=8	6		1						1	8
		75.0		12.5						12.5	100
	合計 n=744	201	217	136	68	70	22		1	29	744
		27.0	29.2	18.3	9.1	9.4	3.0		0.1	3.9	100

はそれぞれ最多のGrade

XIV. 回復期リハビリテーション病棟からの転帰先と mRS

回復期リハビリテーション病棟から退院した患者の転帰先と mRS との関係を図 14-1 に示した。なお、回復期リハビリテーション病棟から退院した 228 人から、mRS の不明や未記入、そして Grade 6（死亡）を除いた 223 人を分析対象とした。

在宅への退院者は 152 人（68.2%）であった。その割合は Grade 0 から Grade 2 までは 90%以上、Grade 3 では 72.2%であったが、歩行に介助が必要となる Grade 4 では 47.5%と半数を割っていた。

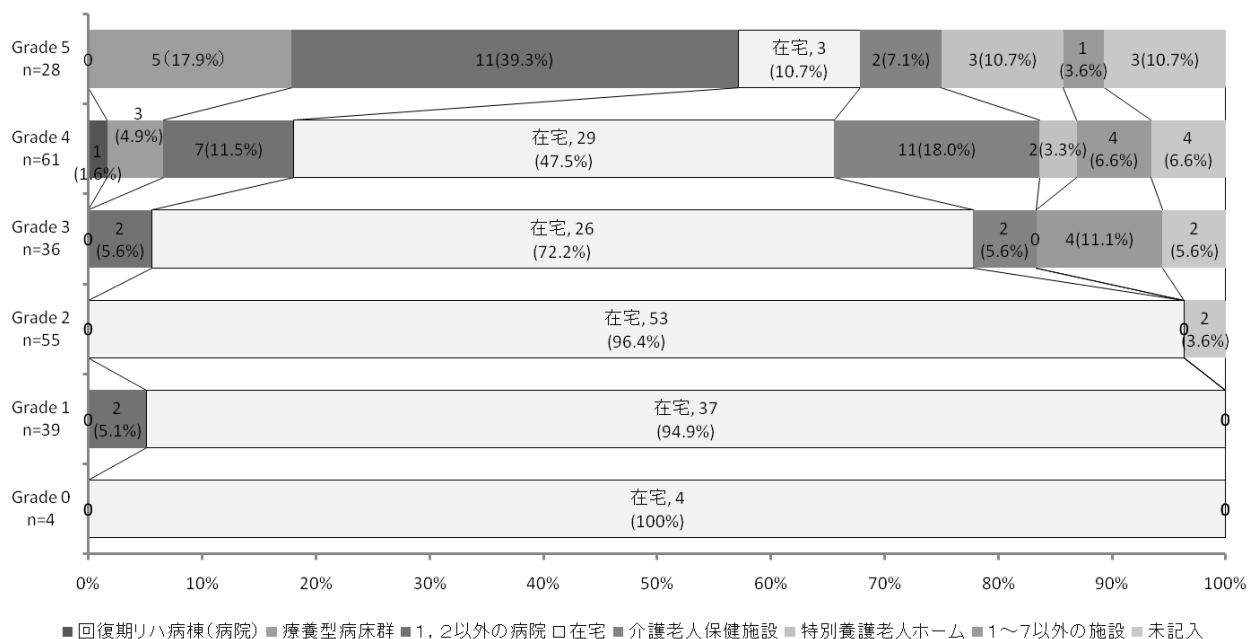


図 14-1 回復期リハビリテーション病棟からの転帰先と mRS n=223 (単位：人、%)

XV. 併存障害の有無と転退院先

併存障害の有無と転退院先について図 15-1 に示した。ここでは死亡及び転退院先が未記入であった 296 人を除く 1,187 人を分析対象とした。

1,187 人中、併存障害が無い患者は 726 人 (61.2%) であり、その割合が高いのは在宅への退院で 744 名中 550 名 (73.9%)、次いで回復期リハビリテーション病棟への転院 135 名中 81 名 (60.0%) であった。

これら以外の転退院先では、半数以上の患者に併存障害があった。併存障害がある患者の割合が最も高かったのは療養型病床群への転院で 53 人中 43 人 (81.1%) であった。

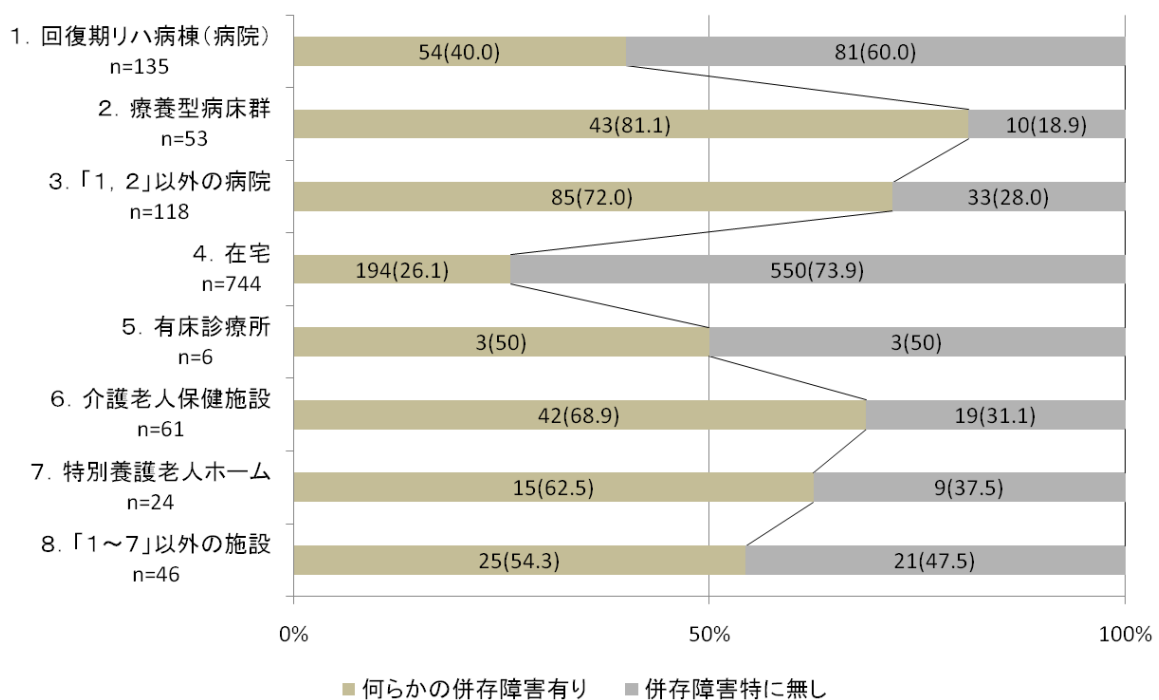


図 15-1 併存障害の有無と転退院先 n=1,187 (単位: 人、%)

併存障害として最も多かった認知症の有無による転退院先について図 15-2 に示した。分析対象の 1,187 人の中で認知症が有る患者は 154 人（13.0%）であった。

在宅への退院 744 人中で認知症が有るとの回答は 57 人（7.7%）であり、有床診療所を除き、その占める割合が最も低かった。次いでその割合が低かったのは 1、2 以外の病院そして回復期リハビリテーション病棟（病院）への転院であり、両者とも 15%未満であった。

一方、認知症が有る患者の割合が最も高い転退院先は特別養護老人ホームであり 24 人中 13 人（54.2%）、次いで介護老人保健施設の 26 人（42.6%）であった。認知症が有る患者の転退院先としては、医療機関よりも介護保険施設の占める割合が高いことが認められた。

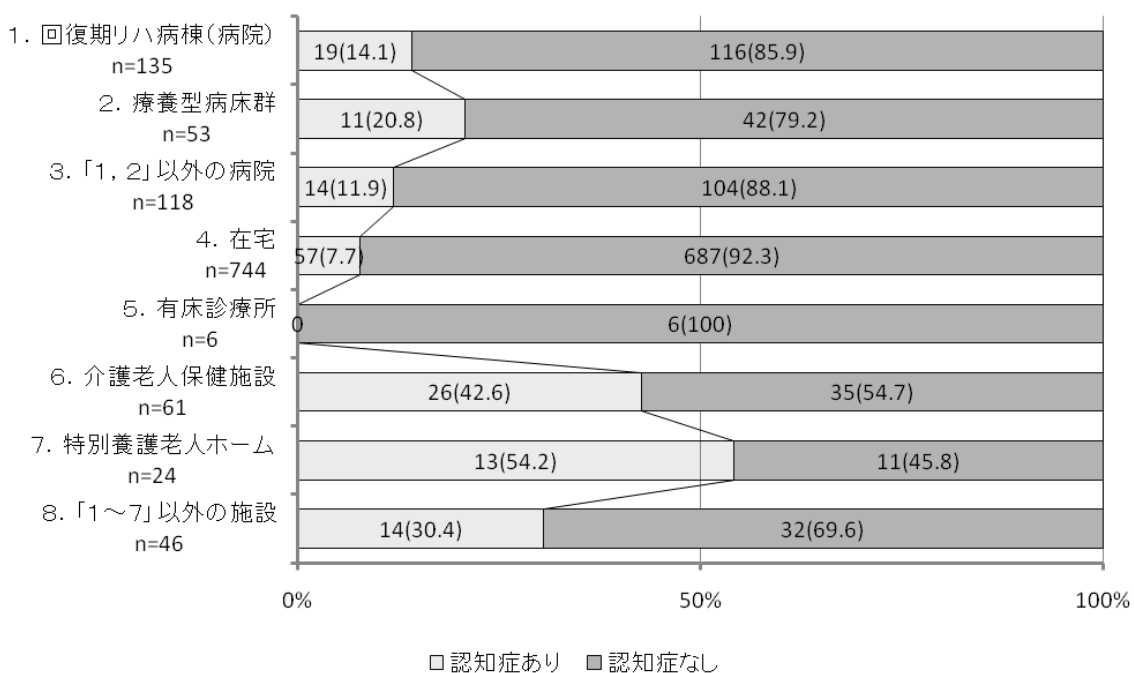


図 15-2 認知症の有無と転退院先 n=1,187 (単位：人、%)

次に、意識障害の有無による転退院先について図 15-3 に示した。分析対象である 1,187 人の中で意識障害がある患者は 53 人（4.5%）であった。

特別養護老人ホームへの退院 24 人全員で意識障害が無く、その占める割合が最も高かった。次は在宅への退院であり 744 人中 737 人（99.1%）であった。

回復期リハビリテーション病棟（病院）では 135 人中 125 人（92.6%）に意識障害がなく、その割合が医療機関の中で最も高かった。

医療機関が介護保険施設よりも意識障害がある患者を受け入れている割合が高い現状が認められた。

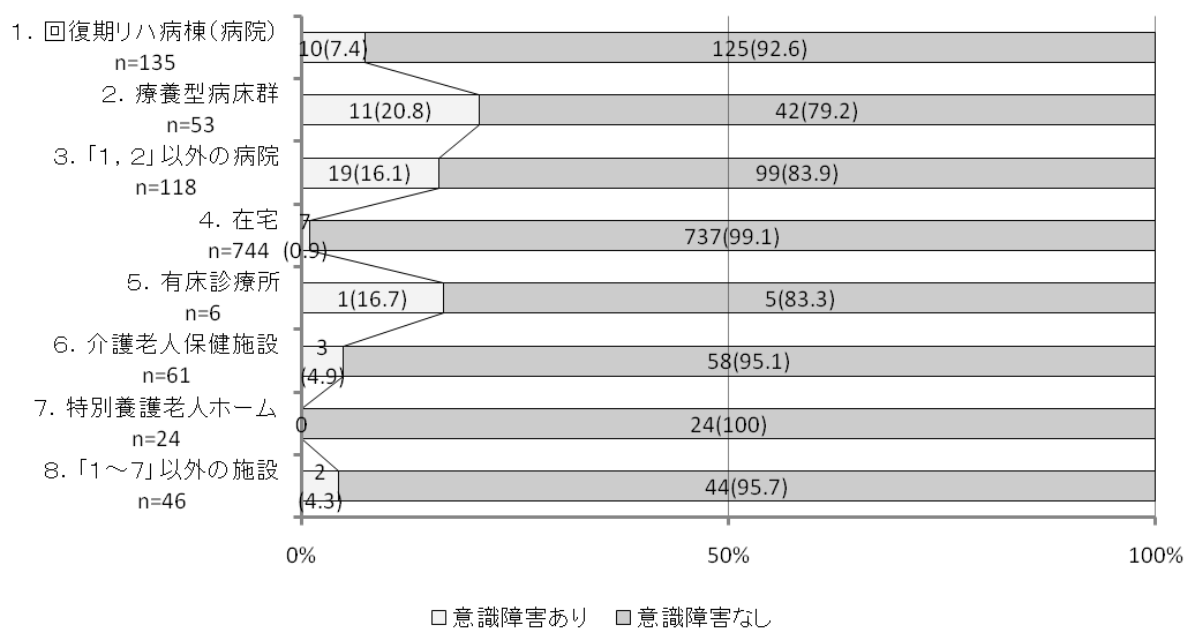


図 15-3 意識障害の有無と転退院先 n=1,187 (単位：人、%)

次に、危険行動を伴う高次脳機能障害の有無による転退院先について図 15-4 に示した。分析対象の 1,187 人の中で危険を伴う高次脳機能障害がある患者は 73 人（6.1%）であった。

危険を伴う高次脳機能障害がある患者の割合が低かった転退院先は、有床診療所、在宅、回復期リハビリテーション病棟（病院）であり、割合が高かった転退院先は 1～7 以外の施設、特別養護老人ホーム、療養型病床群、であった。

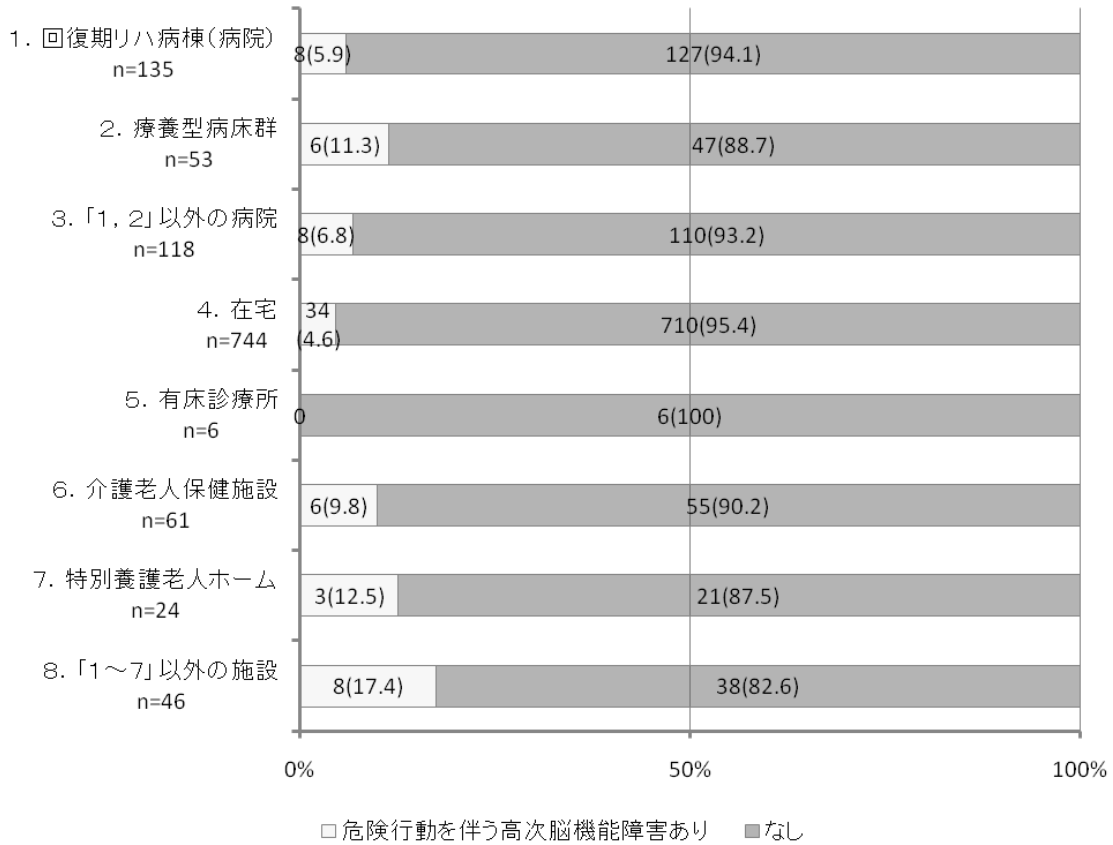


図 15-4 危険行動を伴う高次脳機能障害の有無と転退院先 n=1,187 (単位：人、%)

